

# 銀河を仰いで

——高齢者文学人生論

近松秋江 (1876-1914)

『銀河を仰いで』 (1925) 「中央公論」

『別れた妻に送る手紙』 (1910) 「早稲田文学」

『魂祭』 (1926) 「中央公論」

『子の愛の為に』 (1924) 「中央公論」

日本外史の著者頼山陽が 老母を伴つて吉野の花を観たといふ、ある絵物語を読んで

近松秋江は自然主義文学作家で、代表作は『別れた妻に送る手紙』。もっぱら自分自身の体験を赤裸々に描いた。

痴愚小説、情痴小説の作家というイメージが強く、赤木桁平『遊蕩文学撲滅論』で槍玉の筆頭にあげられたことがある。

そんな作家の小説なら無視してもよいようなものだが、同郷出身のよしみで『別れた妻に送る手紙』を読んでみた。なるほど、妻に逃げられた男の未練がめんめんと綴られている。孤独な男のさびしい気持が伝わってきて、身につまされる、

男心の未練を描いた痴愚小説とはいえ、痴愚は百人煩惱の一つだ。坪内逍遙が説くように、人情即ち百人煩惱を模写することが小説神髄だとすれば、『別れた妻に送る手紙』は田山花袋『蒲団』に匹敵する私小説の名作にちがいない。

秋江が『別れた妻に送る手紙』を発表したときは三十五歳。その後、『疑惑』『黒髪』など痴愚小説の名作が続いたが、四十七歳になって子宝に恵まれ、作風が変わった。『子の愛の為に』では愛情を向ける対象が女から子にうつっているが、これも男心の自然のなりゆきを示しているといえないこともない。

さらに『銀河を仰いで』では、老境の曲がり角にさしかかった作家が自分の若い頃を振り返った



# 銀河を仰いで

高齢者文学人生論

り、避暑のために興津の海岸へ妻と二人の女の子をつれていく計画を立てたり、八十四歳の高齢で耄碌した母を見舞ったりしている。ロマンチックに女を追いもとめる傾向が強かったとはいえ、実は母親孝行で子煩悩な男だったようだ。

若い頃、徳富蘆花の『自然と人生』によって自然を愛する心を思い、国木田独歩の『武蔵野』を読んで武蔵野の自然を懐かしみ、尾崎紅葉や樋口一葉の小説によって古い東京の街やそこに住む人間に興味を湧かしたのは、もう遠い夢になった。

そして、最近までの生活は、自分自身のことばかりに全力を尽くして生きてきたが、自分一個の欲望ばかり思い詰めて生きることには倦んだ。家族というもののために自己を犠牲にすることは、そんなに堪えがたい苦痛とも思わない。

少年の頃愛読した『日本外史』の著者頼山陽のように老母を伴って吉野の花を観ることを楽しい空想の一つにしていたが、その空想は実現することができないまま、郷里に帰省して、母がひどく老衰しているのを見て驚いた。

八十四歳では老衰するのは無理からぬことではあるが、人間の死に近づいた場合の、あるもの物凄さと恐怖を見て、悽愴の感を抱いた。

秋江も老衰死で、享年六十九。晩年、両眼を失明し、母よりも短命だったが、二人の娘に口述筆記を手伝ってもらおうという幸せに恵まれた。

梅は散り、さくらは咲いて一人旅

西へ行くにはふさわしき頃 母の従兄の僧